

### Ⅲ 平成２９年度研究開発の成果と課題

#### １ 仮説の検証

##### (１) 仮説１について

###### ア 仮説１

教育課程に、グローバル・リーダー育成を目的とした教科を設定し、グローバルな視点からものごとを捉える学習内容にするとともに、日本の歴史・伝統・文化及びグローバルな課題に係る授業、調査活動、体験活動、交流活動、発表活動等を取り入れれば、日本の歴史・伝統・文化に対する理解が深まり、グローバルな社会課題に対する関心・意欲、探究心が高まり、思考力・判断力・表現力・情報活用能力等が向上し、コミュニケーション能力が身に付くのではないかと。

###### イ 身に付けさせたい能力等

- ① 日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化
- ② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力
- ③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心
- ④ コミュニケーション能力

###### ウ 実施内容

- ① 研究開発２ 教育課程の編成  
学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GL世界史」及び「GLアクティブ」の実施
- ② 研究開発３ 国内グローバル研修  
「GLアクティブ」において英語宿泊研修の実施
- ③ 研究開発５ 大学との連携  
「GLアクティブ」「GL探究」（総合的な学習の時間）において大学訪問や大学教授等の講演・講義・課題研究支援の実施
- ④ 研究開発６ 企業・国際機関等との連携  
「GLアクティブ」「GL探究」（総合的な学習の時間）において企業や国際機関等との訪問、講演、課題研究支援の実施
- ⑤ 課題研究以外の研究開発１ 教育課程の編成  
学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GLコミュニケーション英語」及び「GL英語研究」の実施

###### エ 検証方法

- ① 生徒、保護者によるアンケート
- ② 課題研究及びプレゼンテーション等の成果からの分析



オ 関係するアンケート

A「日本の歴史・伝統・文化について語ることができる。」

【第2学年生徒アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
2.1%	15.0%	38.6%	28.6%	11.8%	3.9%
2.3%	18.5%	44.5%	21.9%	11.0%	2.3%
7.2%	23.4%	43.8%	16.2%	6.4%	3.0%

【第2学年保護者アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
2.4%	22.4%	38.6%	21.9%	12.4%	2.4%
4.5%	21.1%	40.7%	23.6%	6.5%	3.5%
7.5%	16.3%	40.8%	26.5%	6.8%	2.0%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
3.7%	13.8%	36.4%	27.1%	14.1%	4.8%
9.7%	24.7%	42.5%	17.0%	4.6%	1.5%

B「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる。」

【第2学年生徒アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.1%	8.6%	30.7%	27.1%	22.1%	10.4%
1.5%	8.3%	35.8%	31.3%	17%	5.7%
3.0%	14.9%	36.2%	24.7%	14.5%	6.8%

【第2学年保護者アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.9%	12.9%	28.7%	32.5%	15.8%	8.1%
2.5%	9.5%	39.7%	28.6%	16.6%	3.0%
3.5%	11.8%	38.2%	31.3%	11.8%	3.5%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 下段平成30年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.1%	7.9%	29.0%	30.1%	20.8%	11.1%
3.5%	12.0%	44.2%	27.1%	8.9%	4.3%



C「グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている」

【第2学年生徒アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言えば思う	どちらかと言えば思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.8%	8.2%	23.6%	35.0%	22.9%	8.6%
1.5%	6.8%	28.4%	34.8%	19.0%	9.8%
2.6%	9.8%	30.2%	30.6%	16.2%	10.6%

【第2学年保護者アンケート】(上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言えば思う	どちらかと言えば思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.4%	9.6%	20.1%	35.4%	27.3%	6.2%
0.5%	7.5%	27.1%	39.2%	19.6%	6.0%
3.4%	8.9%	26.0%	45.2%	11.6%	4.8%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 下段平成30年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言えば思う	どちらかと言えば思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.4%	6.8%	26.2%	34.1%	20.4%	11.1%
1.2%	10.9%	37.9%	29.7%	14.1%	6.3%

カ 分析

① 日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化

平成30年2月実施のアンケートA「日本の歴史・伝統・文化について語ることができる」について肯定的回答率が2学年生徒は74.4%であり平成28年7月と比較すると約19ポイント増えている。同保護者の肯定的評価は64.6%であった。グローバルな課題を解決する上で日本の歴史・伝統・文化を関係付けることを前提としたので、理解が深化していると言える。課題研究の発表を見ると、グローバル化によるアイデンティティの喪失の危機を課題として取り上げた生徒は、日本の伝統工芸について理解を深め、来日する外国人に食の提供を図る研究をしている生徒は、日本の食文化について理解を深めており、課題研究により日本の歴史・伝統・文化の理解を深化させることができていることが確認できた。第1学年生徒は、76.9%の生徒が肯定的に回答している。1年生と2年生では、「理解」の捉え方が異なると考えられるが、5月の53.9%から23ポイント上昇している。

② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力

平成30年2月実施のアンケートB「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる」について、第2学年生徒は、肯定的回答率が54.1%であり、平成28年7月と比較すると、約14ポイント増えている。同保護者の肯定的回答率は53.5%であった。第2学年生徒のルーブリック評価では該当項目の自己評価について58%から61%の生徒が概ね目標に到達している。課題研究の発表では、ほとんどのグループが量的調査及び質的調査の結果等客観的なデータを分析し、思考を進めて実行すべきことを判断している。また、図表等を用いて説明する等、思考力・判断力・表現力・情報活用能力は確実に向上していると捉えている。また、「GL探究」の内容を改善したことで、第1学年生徒の肯定的回答率は、59.7%であり、昨年度の1年生の2月と比較すると、14.1ポイント上回っている。



③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心

平成30年2月実施のアンケートC「グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている」について肯定的回答率が第2学年生徒は42.6%であり、平成28年7月と比較すると9ポイント増えており、保護者の肯定的評価は38.3%である。グローバルな社会課題について関心・意欲・探究心は高まっていると捉えているが、課題研究で取り上げているテーマ以外のグローバルな課題について関心が高まらない傾向がある。他の研究グループの研究経過を聞く機会を増やすなどの工夫が必要である。第2学年生徒のルーブリック評価では該当項目の自己評価について61%の生徒が目標に到達していると認識している。第1学年生徒は、肯定的回答率が50%であり、5月と比較すると、15.6ポイント上昇した。やはり、「GL探究」と「GLアクティブ」の改善が効果として表れている。

④ コミュニケーション能力

課題研究を進める上で、外部の人とコミュニケーションをとる必要に迫られたが、社会人としての対応は概ねできたようである。また、課題研究に取り組む方法としてグループによる協働学習を取り入れたが、目的の一つはコミュニケーション能力を高めることにある。課題研究の評価が高かったグループは、グループ内で見解の相違等が生じても解決することができ、円滑に研究に取り組むことができている。調整能力が高いとともにコミュニケーションを適切にとることができたからである。反対に意見の相違や見解の相違から研究の進みが遅れたグループもあった。なお、アンケートでは英語によるコミュニケーションについて回答を求めており、56.6%の生徒が肯定的回答をしており、前年から約13ポイント増加している。

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決に日本の歴史・伝統・文化を関係付けることを課したことが、理解を深めた。1年生については、理解が深まったという自己評価が高く「GL探究」や「GLアクティブ」が効果的に作用したと捉えている。</li> <li>・思考力・判断力・表現力・情報活用能力については、課題研究の方法について、今年度の1年生から時数を増やして学習させたことにより身に付ける率が高かった。</li> <li>・大学及び企業・国際機関等との連携による講義等については、昨年度効果があった講座と新たに導入した講座を実施し、1年生の取り上げた課題に対する考察がより具体的になるなど、探究心の高まりが見られた。</li> <li>・千葉大学や日本政策金融公庫と連携し、課題研究に係る個別の相談ができるようにしたことで、研究が円滑に進んだ。</li> <li>・国内グローバル研修は、英語でのコミュニケーションを積極的に行うことや表現力を高めようとする意欲に結びついている。次年度以降も継続実施しつつ質の向上に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「GLアクティブ」は、週時程外での実施のため、特別活動や部活動等となるべく重複しないように調整したことで、複数の講座が同日に開催することになる等、日程の調整が難しい。参加については、事前に講座について十分理解させた上で生徒に選択させたい。</li> <li>・課題研究グループの中で、リーダーシップを発揮したり、適正なコミュニケーションがとれ調整することができたりするよう、生徒のコミュニケーション能力を向上させる指導が必要である。</li> <li>・学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」については、アクティブラーニングを取り入れた授業を展開するとともに、「GL世界史」においてグローバルな視点に重点を置いた授業や「GLアクティブ」との科目横断的な指導を実施したが、次年度開講する「GL政治・経済」「GL倫理」についても課題研究と関係付けて学習を深めることができるよう授業計画を作成する。</li> </ul>



## (2) 仮説2について

<p>ア 仮説2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>海外研修の機会を設け、現地の高校又は大学と連携を図り、自分の考えを発表したりディスカッションをしたりする機会や交流活動を設けるとともに、現地での調査活動、体験活動を通して日本との比較を行うことでグローバルな課題の解決策を探究させれば、異文化を理解し、より良き未来を指向することができるのではないか。</p> </div>																								
<p>イ 身に付けさせたい能力等</p> <p>日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する力</p>																								
<p>ウ 実施内容</p> <p>研究開発4 海外グローバル研修</p> <p>オーストラリア（7・8月）、シンガポール（9月）、オランダ（11月）、ドイツ（3月）・イギリス（3月）で課題研究に係る現地調査、現地校との交流及び課題研究に係るプレゼンテーション、ディスカッション等の実施</p>																								
<p>エ 検証方法</p> <p>生徒の報告書の分析</p>																								
<p>オ 関係するアンケート（数値は人数）</p> <p>D「今回の海外研修で、課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。」</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th><th>おおいいあてはまる</th><th>だいたいあてはまる</th><th>あまりあてはまらない</th><th>全くあてはまらない</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>オーストラリア</td><td>13</td><td>5</td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr> <td>シンガポール</td><td>2</td><td>10</td><td>3</td><td>1</td></tr> <tr> <td>オランダ</td><td>2</td><td>1</td><td>2</td><td>0</td></tr> </tbody> </table>						おおいいあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	オーストラリア	13	5	1	1	シンガポール	2	10	3	1	オランダ	2	1	2	0
	おおいいあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない																				
オーストラリア	13	5	1	1																				
シンガポール	2	10	3	1																				
オランダ	2	1	2	0																				
<p>E「あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。」</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th><th>おおいいあてはまる</th><th>だいたいあてはまる</th><th>あまりあてはまらない</th><th>全くあてはまらない</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>オーストラリア</td><td>4</td><td>15</td><td>1</td><td>0</td></tr> <tr> <td>シンガポール</td><td>9</td><td>7</td><td>1</td><td>0</td></tr> <tr> <td>オランダ</td><td>1</td><td>3</td><td>1</td><td>0</td></tr> </tbody> </table>						おおいいあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	オーストラリア	4	15	1	0	シンガポール	9	7	1	0	オランダ	1	3	1	0
	おおいいあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない																				
オーストラリア	4	15	1	0																				
シンガポール	9	7	1	0																				
オランダ	1	3	1	0																				
<p>F「あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。」</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th><th>かなりできる</th><th>できる</th><th>少しできる</th><th>全くできない</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>オーストラリア</td><td>1</td><td>12</td><td>7</td><td>0</td></tr> <tr> <td>シンガポール</td><td>4</td><td>9</td><td>4</td><td>0</td></tr> <tr> <td>オランダ</td><td>0</td><td>3</td><td>2</td><td>0</td></tr> </tbody> </table>						かなりできる	できる	少しできる	全くできない	オーストラリア	1	12	7	0	シンガポール	4	9	4	0	オランダ	0	3	2	0
	かなりできる	できる	少しできる	全くできない																				
オーストラリア	1	12	7	0																				
シンガポール	4	9	4	0																				
オランダ	0	3	2	0																				
<p>カ 分析</p> <p>オーストラリアでの研修では、参加者が課題研究で現地高校生に発表しディスカッションを行った。「投票率を上げること」や「平和」をテーマに取り上げたグループは、現地の高校生がこれらのことにあまり関心がないことを知り、日本との違いを実感した。また、「平和」をテーマにしたグループの別の生徒はシンガポールでの研修に参加し、同国の現地高校生とディスカッションを行った。2か国の高校生の考え方を知ることができたことで、課題研究の視点が広がり、今後の方向性が明確になった。アンケートDの</p>																								



<p>とおり、肯定的回答者は41名中33名（80％）と高い。派遣した5か国において、フィールドワークに加えて現地校や大学生に向けてプレゼンテーションを実施するとともに、ディスカッションを行うことで、研究テーマとして取り上げていたことについて、それぞれの国の考え方・捉え方を知ることができた。5か国で現地校においてプレゼンテーションを実施したが、アンケートEのとおり、42名中39名（92.9％）が肯定的回答をしている。しかし、ディスカッションにおいては、アンケートFのとおり、42名中13名（30.9％）が「少しできる」（あまりできない）と回答している。</p>	
成果	課題
<p>・5か国に派遣し、それぞれの国で生徒の多くが「課題研究の新たな視点」を見つげ出すことができ、「日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する」ことに結びつけることができた。特に2年生については、8月・9月実施の2か国は、課題研究に直接関連づけることができた。</p> <p>・生徒は、海外研修を通して、英語でのプレゼンテーションに自信をもつことができたことから、海外においてプレゼンテーションを行うことは、英語による発信力を高める上で効果があった。</p> <p>・シンガポール及びドイツについては、NPO法人や大学、同窓会との連携を図り、講師からは海外経験を基にした指導・助言がなされたため、海外研修が円滑に行われた。</p>	<p>・2か国の研修が連携校の受け入れ時期の関係もあり、本校SGH課題研究発表会を実施している年度末に行われており、行事が密になり、参加生徒と関係職員に負担がかかっている。</p> <p>・派遣先が5か国のため、事前指導の重複があり、英語の指導に当たる職員及びALTの負担が大きくなっているため、効率的に指導する方法を検討する必要がある。</p> <p>・生徒の英語を使ったディスカッション力は、十分身に付いているとは言えず、生徒自身も自覚している。海外（研修先）におけるディスカッションの在り方についての基本的な考え方や姿勢を理解させた上で指導する必要がある。</p>

### （3）仮説3について

<p>ア 仮説3</p> <p>「GLアクティブ」で得た情報を整理し、日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな社会課題について研究(国際間での文化や社会の対立を排除し、その融和の実現を図る探究)を行い、国際社会に発信可能な英語での報告を行わせれば、英語力の向上、課題解決方法を考え創造的提案を行う発信力が高まり、課題を解決する能力と態度が身に付くのではないか。</p>	
<p>イ 身に付けさせたい能力等</p> <p>① 課題を解決する能力</p> <p>② 創造的提案を行う発信力</p> <p>③ 英語力</p>	
<p>ウ 実施内容</p> <p>① 研究開発1 課題研究</p> <p>総合的な学習の時間を「GL探究」とし、1年次に「GLアクティブ」等で得た情報を整理し、グローバルな社会課題から研究課題を定め研究させる。</p> <p>② 課題研究以外の研究開発2 英語力、英語を用いてのコミュニケーション能力の育成</p> <p>英語力向上対策講座や海外からの留学生との交流の機会を設ける。</p>	



③ 地域や同窓会との連携 「G L探究」(総合的な学習の時間)において講演等を実施する。					
エ 検証方法 ① 生徒によるアンケート ③ 留学生等の外部からの評価 ③ 進路希望・進路意識の変容 ④ 英語検定等の達成レベル					
オ 関係する第2学年生徒アンケート (上段平成28年7月 中段平成29年2月 下段平成30年2月実施)  G「日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思 わない
1.4%	4.6%	21.1%	27.5%	30.4%	15.0%
0.4%	4.1%	19.9%	28.9%	25.6%	21.1%
2.1%	11.9%	30.2%	28.1%	16.6%	11.1%
H「他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わ ない
3.2%	3.6%	19.6%	29.6%	32.5%	11.4%
0.0%	2.4%	21.7%	29.9%	24.8%	21.3%
2.2%	9.1%	29.3%	30.2%	16.8%	12.5%
I「英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思 わない
0.4%	3.2%	9.3%	20.4%	35.0%	31.8%
0.8%	5.7%	15.2%	29.9%	22.0%	26.5%
1.7%	7.7%	27.2%	24.7%	20.0%	18.7%
カ 分析 ① 「課題を解決する能力」 平成30年2月実施の生徒アンケートG「日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている」について、肯定的回答率は、44.4%であり、平成28年7月と比較すると約17ポイント増えている。また、ルーブリックによる自己評価では58%の生徒が目標には概ね到達していると捉えている。課題研究発表においては、高校生にできる範囲の解決策を十分検証し実現できそうなものと、解決策を述べているが検証を行うことが困難な事例もあり、生徒の自己評価の分かれるところである。 ② 「創造的提案を行う発信力」					



平成30年2月実施の生徒アンケートH「他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる」について、2月の肯定的回答率は40.6%であった。まだ高い値ではないが、平成28年7月と比較すると、27.7ポイントの上昇であり、課題研究の成果である。研究発表を評価した留学生からはどれも興味深い内容であったという旨のコメントが多くあり、課題研究を通して創造的提案を行うことは、多くのグループができていた。

### ③ 「英語力」

課題研究発表会は、1年生については、英語のポスターを作成し全員が英語でプレゼンテーションを実施することができた。2年生については英語で発表するグループと日本語で発表するグループに分かれた。日本語で発表する場合は、最初に英語で研究概要を説明することとした。2月実施の生徒アンケートI「英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある」については肯定的回答率が36.6%だが、平成28年7月実施時と比較すると23.7ポイント増えた。留学生の評価は、「英語で話す努力が必要」というものが多かった。

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバルな課題を解決する上で、高校生にできる解決策として、例えば戦争や伝統について知ることが大事だと考え、高校生が小学生に授業を行うモデルを作り広めていけば良いと結論づけ、地域の小学校と連携し、授業を実践して検証するなど課題を解決する一つの方法を導き出した。課題研究を行う過程で課題解決能力が身に付いた。</li> <li>・主体的に関係企業やNPO法人等と交渉し、見学やインタビューなどの調査を実施するなど、積極的に社会と関わろうとする姿勢が見られるようになった。</li> <li>・実用英語技能検定試験に係る補習等の実施により受検者が増え、第3学年生徒は2級以上を69名が取得しているが、SGH対象の2年生は113名が取得しており、44名増えている。英検IBAでは、CSEスコアの平均スコアが平成27年度2年生は1005、28年度は1028に対して、29年度2年生は1030であり、SGH対象生徒の英語力は着実に伸びている。SGUへの進学を希望する生徒は平成28年7月から27.6ポイント上昇し65.9%となった。</li> <li>・「GL探究」の実施内容を改善し課題研究に早期に取り組めるようにしたことと、課題研究の手法を学習する時間を多く確保することで、研究テーマ等が具体的になり、昨年度の1年生よりも研究の方向性が明確であるグループが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「GL探究」は、共通のプリント教材を使用しているが、指導方法は担当教員の裁量によるところがあり、円滑に進まない場面が見られた。担当教員に生徒が左右されることなく主体的に学習を進めることができる教材を作成する必要がある。</li> <li>・グループ活動等において、対話をしながら考えを深め、協働的に課題を解決に導くことを期待していた。予定どおり進んだグループもあるが、クラスによってはグループが7～8名で構成されており、研究に係る分担に軽重が認められた。一人一人が研究に関われるよう、ジグソー法などを用いて所属グループの研究を誰かに説明する機会を設けることを検討したい。</li> <li>・第2学年のグループは、第1学年時のクラスで研究を進めているが、研究テーマがグループごとに大きく異なり、担当職員からの指導・助言に時間がかかってしまうことがあったので、次年度は研究テーマごとのクラスを編成する。</li> <li>・「GL探究」については時間の確保に努めているが、2時間連続で実施する場合授業交換を行うために、翌週は「GL探究」の実施ができなくなり、継続指導が難しくなることがある。限られた時間での実施なので調整を十分図るとともに時間確保の工夫が必要である。</li> </ul>

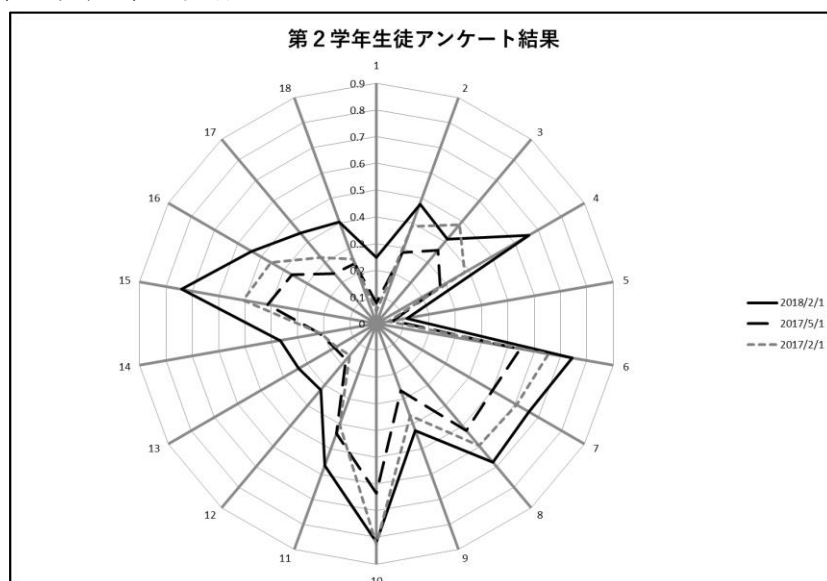


## 2 生徒の意識の変容

平成29年5月と平成30年2月に同じ質問項目で第1・2学年生徒及び第1・2学年普通科生徒の保護者対象にアンケート調査を行った。研究開発の質問項目は、次のとおりである。

- 1 主体的に社会貢献活動に取り組んでいる。
- 2 課題を自ら見付け主体的に課題について研究を深めている。
- 3 将来海外留学をしたり，仕事で国際的に活躍したりしたいと考えている。
- 4 国際化に重点を置いている大学に進学したい。
- 5 海外の大学に進学したい。
- 6 日本の歴史・伝統・文化について語ることができる。
- 7 日本と世界の歴史・伝統・文化とを比較研究することができる。
- 8 博物館等の研究機関を利用して研究することができる。
- 9 グローバルな社会課題に対する関心が高く，主体的に社会課題を探究しようとしている。
- 10 異文化を理解し柔軟に受け入れることができる。
- 11 英語で他国の人と身近な話題についてコミュニケーションができる。
- 12 英語で他国の人と社会的な話題についてディスカッションができる。
- 13 外国に行き，英語で現地の人とコミュニケーションを取りながら，共同で調査をしたり交流をしたりすることができる。
- 14 英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。
- 15 プレゼンテーションソフトを使った発表ができる。
- 16 日本と世界との歴史的つながりを踏まえ，日本の未来の在り方を志向し，グローバルな視点で歴史，伝統，文化，芸術，政治，経済，環境等について考えることができる。
- 17 日本人の立場で，国際的な文化や社会の対立を排除し，その融和を実現する方法を考えている。
- 18 他国の人に対して，日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。

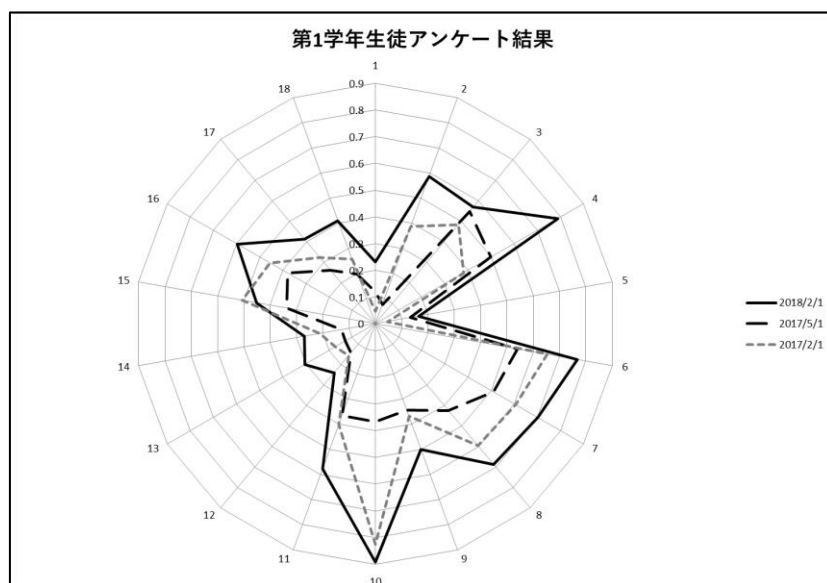
### (1) 第2学年生徒の変容





「第2学年アンケート結果」のグラフからも分かるように、SGHに係る取組を行うことにより、概ねどの項目についても肯定的回答率が上昇しており、意識が高まっていることがわかる。質問項目3については、平成29年2月（2017/2/1）が平成30年2月（2018/2/1）を上回っている。「将来海外留学をしたり、仕事で国際的に活躍したりしたいと考えている」ことについて意識が下がっていることになるが、高等学校卒業後の進路と向き合う時期を迎えていることが影響していると考えられる。質問項目5の意識が高まらないのも同様の理由である。反対に質問項目4「国際化に重点を置いている大学に進学したい」という意識は高まっている。英語に関する項目12、13、14については、まだ、自信に結びついていないことが分かる。英語力については、英語を活用して自信をもたせる取組が必要である。質問項目15「プレゼンテーションソフトを使った発表ができる」という意識は大きく高まっている。プレゼンテーションソフトを利用した発表を授業に取り入れている教科があり、それらの経験が自信に結びついていると考えられる。

## （2）第1学年生徒の変容

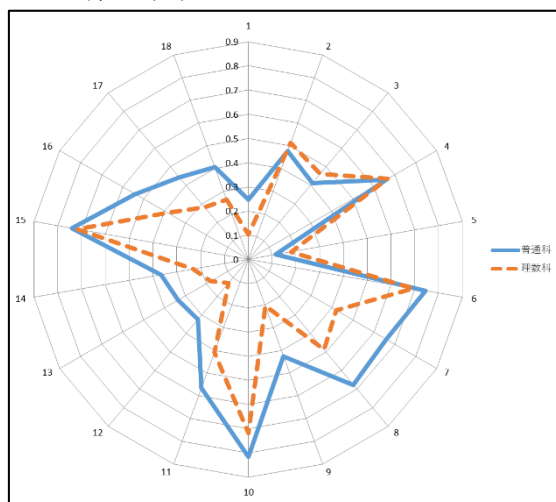


「第1学年生徒アンケート結果」のグラフから、平成29年5月（2017/5/1）から平成30年2月（2018/2/1）の間にどの項目についても意識の高まりが見られる。特に質問項目10「異文化を理解し柔軟に受け入れることができる」質問項目16「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる」の2項目は意識の高まりが非常に大きい。これは、「GL探究」「GLアクティブ」「GL世界史」「GLコミュニケーション英語」の影響が大きいものと考えられる。SGHに係る取組が機能していることの表れである。さらに平成28年度の第1学年生徒の平成28年2月（2017/2/1）の肯定的回答率と比較すると、ほとんどの項目について、平成29年度第1学年生徒の方が高い回答率となっている。前年度の実施の反省を踏まえ改善した「GL探究」「GLアクティブ」等の内容が生徒の変容に影響していると考えられる。

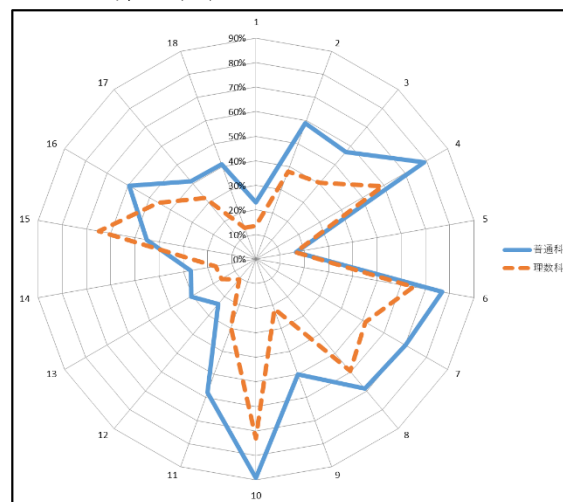


### (3) S G H対象外の生徒との比較

#### 第2学年



#### 第1学年



第2学年については、質問項目7～9、11～14、16～18がS G H対象生徒の方が上回っている。7～9は日本の歴史・伝統・文化に係ることやグローバルな課題に係ること、11～14は英語力にかかること、16～18はグローバルな課題についての思考力・判断力・表現力や解決能力や提案力に係る項目である。本校において身に付けさせたい能力に当たる部分であり、S G Hに係る取組が確実に成果となって表れている。

第1学年についても概ね同様のことが言える。1学年の特徴は2～4についてもS G H対象生徒の方が意識が高いということである。2～4は海外留学や国際社会に参画する意識であり、第2学年生徒よりも意識が高い。反面11～14に係る英語力については、対象外の生徒よりは肯定的回答率は高いが、十分とは言えない。

これらのことから、本校のS G Hに係る取組で身に付けさせたい力が高まっていると意識している生徒は確実に増えており、成果が出ていると言える。また、英語力については「G Lコミュニケーション英語」で英語運用能力の向上を図るとともに、積極的に海外の人と英語でコミュニケーションをとる機会を設ける必要がある。

### 3 外部の課題研究発表会等の参加状況

- (1) 第5回「高校生ビジネスプラン・グランプリ」  
高校生ビジネスプラン・ベスト100に選出(1チーム)
- (2) 第2回関東・甲信越静地区 スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会(立教大学)  
プレゼンテーション 英語 2チーム, 日本語 1チーム  
ポスター発表 英語 1チーム, 日本語 1チーム
- (3) 第3回国際研究発表会(千葉大学)  
ポスター発表 英語 1チーム
- (4) S G H甲子園2018(関西学院大学)  
ポスター発表 英語 1チーム



#### 4 ルーブリックを用いた課題研究評価（試行）

- (1) 教員2名（第1評価者，第2評価者）で評価を行う。評価は合議により数値化（A B C D）する。評価が分かれた場合，第1評価者の評価を評価とする。
- (2) 教員2名での評価が難しい課題研究については，SGH担当者と協議し，千葉大学等の専門家の意見を参考に評価する。
- (3) 年間3回（発表会前まで，発表会後または各種コンテスト後まで，レポート等提出後まで）とする。発表会前，発表会後または各種コンテスト後の前2回の教員評価時に，生徒の自己評価（同じルーブリック表）を提出し，教員が生徒の評価の違いを説明し，生徒に身につけさせたい資質能力8つの向上を図る。
- (4) 第3回目の評価を年度末の評価とする。
- (5) 生徒に身につけさせたい資質能力8つを基にルーブリックを用い評価する。
- (6) 次のルーブリック項目に基づき全体評価（年度末）する。

項目の評価	全体評価
Aが3つ以上かつC, Dが0	A
Aが1～2かつDが0	B
Aが0, Dが1以下	C
Aが0, Dが2以上	D

- (7) 評価は，SGH委員会の審議を経て，成績会議に提案され校長が認定する。
- (8) ルーブリックを用いた教員の課題研究評価（試行）を実施した研究課題と人数

研究課題	学年	人数
Reducing Food Loss through the Promotion of Doggy Bags	2	8
Japanese Ramen for Muslims!	2	6
Save The Abandoned Animals from Animals Unfortunate Death	2	5
餃子で築く日中の友好関係	2	7
Learn From Youkai	2	5
What Should We Do to Hand Down War Experiences?	2	4
伝統工芸を広めよう ～アイデンティティを失わないために～	2	7



## (9) 使用したルーブリック

1 年

課題研究プロセス1年 評価 研究テーマ					
身につけさせたい資質・能力等 ①日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化 ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探求心 ④コミュニケーション能力 ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しよりよき未来を志向する力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案を的確に発信する力 ⑧英語力					
資質・能力	項目	A(4) 求めているレベルに十分達している	B(3) 求めているレベルにおおむね達している	C(2) 求めているレベルにもう少しで達する	D(1) 求めているレベルに達するためにかなりの努力が必要である
②思考・判断・表現・情報活用能力 ③関心・意欲・探求心	テーマのたて方 (研究目的、調査項目の設定)	独創的で、明確なテーマが設定されていて、研究目的や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で、実現可能なテーマが設定されていて、研究目的や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	テーマがはっきりしない。研究目的や調査項目が示されていない。
	先行研究・先行事例等の資料の活用	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付け効果的に活用している。	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付けている。	複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料を示している。	これまでの先行研究・先行事例について示されていない。
	研究方法(調査方法)と分析の視点	複数の研究方法や分析の視点から、テーマ・研究目的にふさわしいいくつかの研究方法(調査方法)を用い、明確な分析の視点を示している。	複数の研究方法や分析の視点から、テーマ・研究目的にふさわしい研究方法(調査方法)を用い、分析の視点を示している。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用い、分析の視点を示している。	研究方法と分析の視点が示されていない。
①日本の歴史・伝統・文化	日本の歴史伝統文化の理解	課題研究に関係する日本の歴史・伝統・文化について具体的に説明することができる。	課題研究に関係する日本の歴史・伝統・文化について概要を説明することができる。	課題研究に関係する日本の歴史・伝統・文化について部分的に説明することができる。	課題研究に関係する日本の歴史・伝統・文化について部分的でも説明することができない。
④コミュニケーション能力	役割分担と協力	自分の役割を積極的に果たしながら、他のメンバーの手助けを行い、グループ研究で行う優れた研究をリードしている。	自分の役割を十分果たすとともに、建設的な意見を出すなど、グループ研究に貢献している。	自分の役割はおおむね果たしているが、他のメンバーへの寄与はさほど大きくない。	自分の役割は自覚しているものの、それを十分果たせていない。
⑧英語力	課題研究発表	英語で研究テーマ、目的、調査方法、を的確に説明したりできる。質問に英語で的確に答えることができる。	英語で研究テーマ、目的、調査方法、説明できる。質問に英語で答えることができる。	英語で研究テーマ、目的を説明できる。	英語で研究テーマ、目的を説明できない。

\*中央教育審議会 高等学校部中央教育審議会「ルーブリックを活用したアセスメント」2012.11.19、愛媛大学課題研究ルーブリック、千葉工業高校ルーブリックを参考に作成

2 年～3 年

課題研究プロセス2年 評価 研究テーマ					
身につけさせたい資質・能力等 ①日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化 ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探求心 ④コミュニケーション能力 ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しよりよき未来を志向する力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案を的確に発信する力 ⑧英語力					
資質・能力	項目	A(4) 求めているレベルに十分達している	B(3) 求めているレベルにおおむね達している	C(2) 求めているレベルにもう少しで達する	D(1) 求めているレベルに達するためにかなりの努力が必要である
②思考・判断・表現・情報活用能力 ③関心・意欲・探求心	テーマのたて方 (研究目的、調査項目の設定)	明確で実現可能な独創的テーマが設定されていて、研究目的や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で、実現可能なテーマが設定されていて、研究目的や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	テーマがはっきりしない。研究目的や調査項目が示されていない。
	先行研究・先行事例等の資料の活用	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付け効果的に活用している。	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付けている。	複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料を示している。	これまでの先行研究・先行事例について示されていない。
②思考・判断・表現・情報 ⑤異文化理解・未来志向力	研究方法(調査方法)	テーマ・研究目的にふさわしい独自の研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を複数用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いていない。
	分析	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などと比較し、他者にわかりやすいように分析した結果をグラフなどで示している。	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などとの類似点・相違点など分析している。	調査した内容をグループでまとめている。	調査した内容をグループでまとめられていない。
⑤異文化・未来志向力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案	結論(提案・改善案)今後の展望	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を効果的に用いて、より具体的な提案ができています。	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を用いて論理的に説明できている。	調査から明らかになったことについて記述(発表)し、得た情報ある程度用いて説明できている。	調査から得られた情報の記述(発表)もできておらず、これまでに学んだ考え方や研究内容も用いられていない。
①日本の歴史・伝統・文化	日本の歴史伝統文化の理解の深化	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、テーマと関連付けてより具体的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、論理的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値を捉え、説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値について触れていない。
④コミュニケーション能力	役割分担と協力	自分の役割を積極的に果たしながら、他のメンバーの手助けを行い、グループ研究で行う優れた研究をリードしている。	自分の役割を十分果たすとともに、建設的な意見を出すなど、グループ研究に貢献している。	自分の役割はおおむね果たしているが、他のメンバーへの寄与はさほど大きくない。	自分の役割は自覚しているものの、それを十分果たせていない。
⑧英語力	課題研究発表とレポート	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。質問に英語で答えることができる。	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できない。

\*中央教育審議会 高等学校部中央教育審議会「ルーブリックを活用したアセスメント」2012.11.19、愛媛大学課題研究ルーブリック、千葉工業高校ルーブリックを参考に作成



[illegible]

9月 シンガポール海外研修 発表前の生徒Aの自己評価

国際研究プロジェクト2年 評価 研究テーマ					
身につけたい資質・能力等 ①日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化 ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探求心 ④コミュニケーション能力 ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しよりよい未来を志向する力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案を的確に発信する力 ⑧英語力					
資質・能力	項目	A(4) 求めているレベルに十分達している	B(3) 求めているレベルにおおむね達している	C(2) 求めているレベルにもう少し達する	D(1) 求めているレベルに達するために十分な努力が必要である
②思考・判断・表現・情報活用能力 ③関心・意欲・探求心	テーマのたて方 (研究目的、調査項目の設定)	明確で実現可能な独自のテーマが設定されており、研究目的や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	テーマがはっきりしない。研究目的や調査項目が示されていない。
②思考・判断・表現・情報 ⑤異文化理解・未来志向力	先行研究・先行事例等の資料の活用	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料に関連付け効果的に活用している。	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料に関連付けている。	複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料を示している。	これまでの先行研究・先行事例について示されていない。
	研究方法(調査方法)	テーマ・研究目的にふさわしい独自の研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を複数用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いていない。
②思考・判断・表現・情報 ④コミュニケーション能力	分析	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などと比較し、他者にわかりやすいように分析した結果をグラフなどで示している。	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などの類似点・相違点などを分析している。	調査した内容をグループでまとめている。	調査した内容をグループでまとめられていない。
⑤異文化・未来志向力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案	結論(提案・改善案) 今後の展望	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を効果的に用いて、より具体的な提案ができている。	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を用いて論理的に説明できている。	調査から明らかになったことについて整理し、得た情報がある程度用いて説明できている。	調査から得られた情報の記述(発表もできず)で、これまでに学んだ考え方や研究内容も用いられていない。
①日本の歴史・伝統・文化	日本の歴史・伝統・文化の理解の深化	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、テーマと関連付けてより具体的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、論理的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値を捉え、説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値について触れていない。
④コミュニケーション能力	役割分担と協力	自分の役割を積極的に果たしながら、他のメンバーの手助けを行い、グループ研究で行う優れた研究をリードしている。	自分の役割を十分に果たし、また、建設的な意見を出すなど、グループ研究に貢献している。	自分の役割はおおむね果たしているが、他のメンバーへの寄与はさほど大きなない。	自分の役割は自覚しているものの、それを十分果たせていない。
⑧英語力	課題研究発表とレポート	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。質問に英語で答えることができる。	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できない。

123



## 9月 シンガポール海外研修 発表前の生徒Aに対する評価

課題研究プロセス2年 評価 研究テーマ					
身につけさせたい資質・能力等 ①日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化 ②思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探求心 ④コミュニケーション能力 ⑤日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しよりよき未来を志向する力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案を的確に発信する力 ⑧英語力					
資質・能力	項目	A(4) 求めているレベルに十分達している	B(3) 求めているレベルにおおむね達している	C(2) 求めているレベルにもう少し達する	D(1) 求めているレベルに達するためにかなりの努力が必要である
②思考・判断・表現・情報活用能力 ③関心・意欲・探求心	テーマのたて方 (研究目的、調査項目の設定)	明確で実現可能な独自のテーマが設定されており、研究目的や調査項目が分かりやすく整理されて示されている。	明確で、実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	実現可能なテーマが設定されており、研究目的や調査項目が示されている。	テーマがはっきりしない。研究目的や調査項目が示されていない。
②思考・判断・表現・情報 ⑤異文化理解・未来志向力	先行研究・先行事例等の資料の活用	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付け効果的に活用している。	信頼できる複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料をテーマに関連付けている。	複数の情報源から情報を集め、先行研究・先行事例等の資料を示している。	これまでの先行研究・先行事例について示されていない。
	研究方法(調査方法)	テーマ・研究目的にふさわしい独自の研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を複数用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いている。	テーマ・研究目的に沿った研究方法(調査方法)を用いていない。
②思考・判断・表現・情報 ④コミュニケーション能力	分析	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などと比較し、他者にわかりやすいように分析した結果をグラフなどで示している。	調査した内容をグループでまとめ、先行研究・先行事例などの類似点・相違点など分析している。	調査した内容をグループでまとめている。	調査した内容をグループでまとめられていない。
⑤異文化・未来志向力 ⑥課題解決力 ⑦創造的提案	結論(提案・改善案) 今後の展望	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を効果的に用いて、より具体的な提案ができています。	他国・地域と比較検討できるグローバルな要素のある社会課題となっている。また、調査から明らかになったことについて整理し、得た知見を用いて論理的に説明ができています。	調査から明らかになったことについて記述(発表)し、得た情報をある程度用いて説明ができています。	調査から得られた情報の記述(発表)もできておらず、これまでに学んだ考え方や研究内容も用いられていない。
①日本の歴史・伝統・文化	日本の歴史・伝統・文化の理解の深化	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、テーマと関連付けてより具体的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化のグローバル社会における価値を捉え、論理的に説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値を捉え、説明できる。	調査を通して日本の歴史・伝統・文化の価値について触れていない。
④コミュニケーション能力	役割分担と協力	自分の役割を積極的に果たしながら、他のメンバーの手助けを行い、グループ研究で行う優れた研究をリードしている。	自分の役割を十分果たすとともに、建設的な意見を出すなど、グループ研究に貢献している。	自分の役割はおおむね果たしているが、他のメンバーへの寄与はさほど多くない。	自分の役割は自覚しているものの、それを十分果たせていない。
⑧英語力	課題研究発表とレポート	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。質問に英語で答えることができる。	英語で研究テーマ、目的、調査方法、分析、結論(提案・改善案)を的確に説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できる。	英語で研究テーマ、要旨を説明できない。

\*中央教育審議会 高等学校部中央教育審議会「ルーブリックを活用したアセスメント」2012.11.19、愛媛大学課題研究ルーブリック、千葉工業高校ルーブリックを参考に作成

### 2804. Japanese Ramen for Muslims!

Chiba Prefectural Sakura Senior High School Sawo Haya & Hideo Sasaki

~Topic~  
We want to create a Halal based ramen using ingredients which are produced in Chiba. We would start selling it in ramen shops around Chiba. Then, Muslims don't have to worry about meals when they come to Japan, because Muslims have restricted diets. We hope that Muslims can enjoy their stay in Chiba.

~Research 1~

The Number of Visitors to Chiba from Singapore, Malaysia and Indonesia

• The number of visitors to Chiba is increasing.  
• There are many Muslims in these three countries.

~Research 2~

Popular Japanese Foods

Country	1	2	3	4	5
Singapore	Ramen	Sushi	Sashimi	Tempura	Yakitori
Malaysia	Halal Food	Fish	Ramen	Rice	Beef
Indonesia	Halal Food	Fried Chicken	Okonomiyaki	Ramen	Soft Drink

• For every country Ramen ranks in the top 6 for "Popular Japanese Foods".  
• This table's data was collected by a survey of each country using SNS.

~Research 3~

The survey in Singapore (Sep. 2017)

• We could not find any halal ramen shops on Arab Street.  
• When we went to Singapore and interviewed the students, they said "There was no halal ramen, but we want to eat ramen".

~Analysis~

Of Research 1, the number of Muslims tourists in Chiba will increase.  
Of Research 2, many people from Muslim countries see ramen as one of the most popular foods in Japan.  
Of Research 3, Muslims do not have a chance to eat ramen.

~Suggestion~

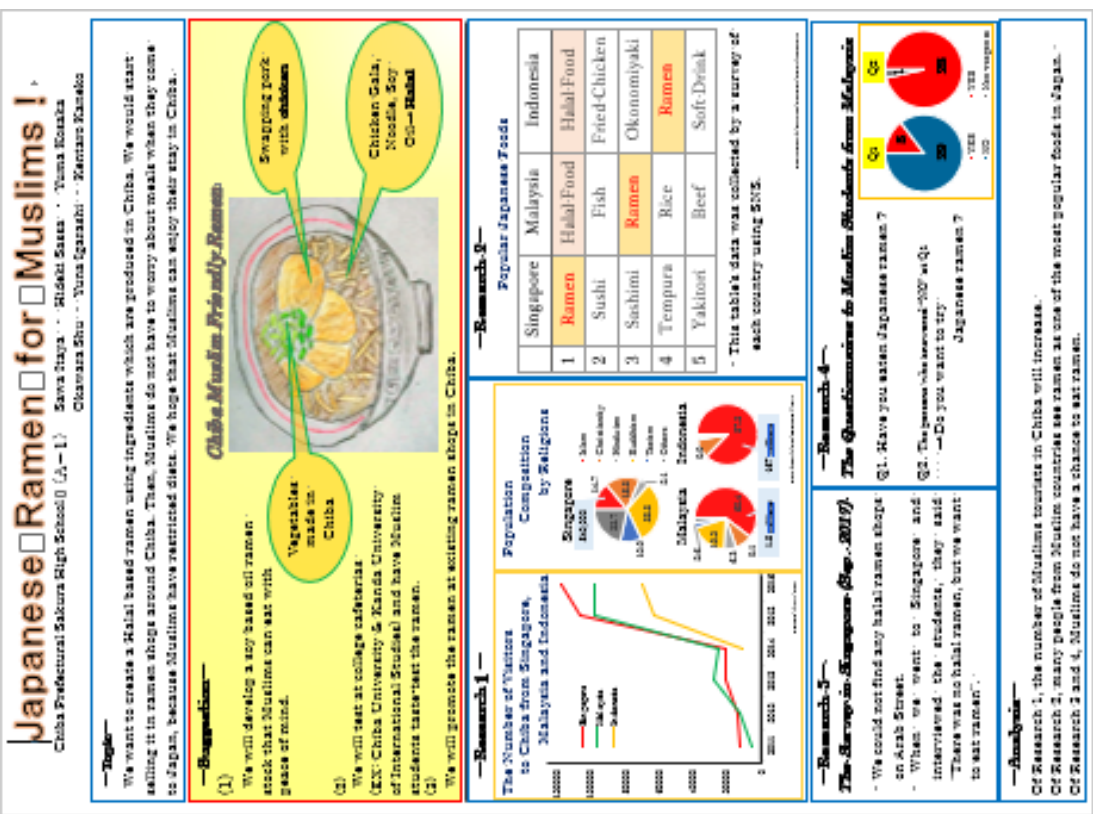
(1) We will develop a soy based oil ramen stock that Muslims can eat with peace of mind.

(2) We will test at college cafeterias (EX: Chiba University & Kanda University of International Studies) and have Muslim students taste test the ramen.

(3) We will promote the ramen at existing ramen shops.

2017年11月作成, パシフィコ横浜で展示





2018年2月作成 校内発表会で発表

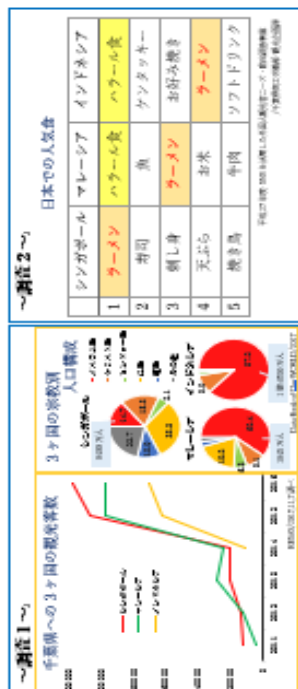
## 日本のラーメンをムスリムに広めよう!

千葉県立佐倉高等学校国際英語・文化芸術

～目的～

近年、千葉県への外国人観光客が増加している。特に、ムスリムの観光客が増加している。ムスリムは食べられるものに制限がある。また、外国人観光客へのラーメンの人気の高まっている。

そこで、千葉県で生産された食材を用いて、ムスリムの方が安心して食べられるラーメンを作り、千葉県の観光を楽しまんでもらいたい。



～調査3～ シンガポールでの現地調査(2017年9月)～

・シンガポールのアップストリートではハラルに特化したラーメン店を見つけた。しかし、「食べない」ということを言っていた。

～分析～

・調査1より、千葉県へのムスリムの観光客が増加している。  
・調査2より、イスラム圏の人々がラーメンを日本の人気のある食品のひとつとして見ている。  
・調査3より、ムスリムがラーメンを食べられる環境が整っていない。

～提案～



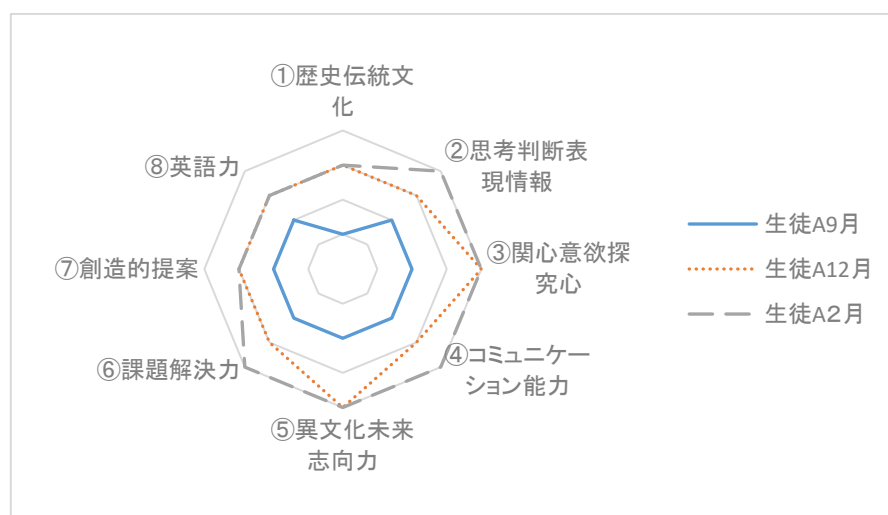


(10) 評価

	生徒 A 9月	生徒 A 12月	生徒 A 2月
①歴史伝統文化	D	B	B
②思考判断表現情報	C	B	A
③関心意欲探究心	C	A	A
④コミュニケーション能力	C	B	A
⑤異文化未来志向力	C	A	A
⑥課題解決力	C	B	A
⑦創造的提案	C	B	B
⑧英語力	C	B	B

全体評価 A

(11) 分析



平成29年9月のシンガポール海外研修参加前は、8つの資質能力は、CとDの評価のみであった。シンガポール現地校で課題研究発表、現地調査をしたことで②思考判断表現情報はCからBに、③関心意欲探究心はCからA、⑤異文化未来志向もCからAへと力を伸ばした。生徒Aにとって、シンガポール海外研修は8つの身につけさせたい力を大きく伸ばすきっかけとなった。

平成29年12月の立教大学で行われたSGH発表会にも積極的に参加し大学の先生や他校生徒からアドバイスを受けたことで、平成30年2月の校内発表時には②BからA、④BからA、⑥BからAに力をさらに伸ばすことができた。

生徒の発表会や海外研修への参加が、8つの力をA、Bに大きく伸ばすきっかけとなっている。また、発表会、海外研修等参加後に教員側評価と生徒の自己評価を分析し、生徒にアドバイスを送るようにしたことが8つの力が伸びた要因と考えられる。



(例) 9月の教員Uと生徒Aの会話の一部

教員U この表を見て。Aさんの自己評価と私とI先生の評価との差がわかるかな。

生徒A 私の自己評価だと8つの項目のうち、Bが7つで、Cが1つです。でも先生方の評価では、Cが7つ、Dが1つです。なぜこうなるのかわかりません。

教員U まずは、Cがついている7つについて説明します。テーマのたて方ですが調査項目の中にシンガポール現地でのラーメン店調査などを入れておけばよかったですね。千葉県内などでラーメン店の調査をしていない点などを考慮し、C評価をしました。今後、さまざまな調査をして、9月以降の調査、分析、発表に生かしてください。

D評価の日本の歴史伝統文化ですが、日本のラーメン文化がいつぐらいから芽生えなぜ人気なのか背景を説明できるようにしてください。

## (12) 課題

ア 教員2名の評価が大きく異なる場合、ルーブリックの大幅な見直しが必要になるのではないか。担当する教員の課題研究に対する意欲や関心、生徒の研究に関する知識の差で生徒の評価が大きく異なる可能性がある。

イ 課題研究をグループ内で進めているので、グループ全体の成果物であるポスターやレポートでは、グループ内の個人の評価をするのが難しい。今回は、グループ内でも積極的に課題研究に取り組んでいる生徒Aを例示したが、消極的な生徒を成果物以外でより客観的に評価するのに現在のルーブリック評価は適切か。

ウ (1), (2)を本校職員全員で行う場合の負担がかなり大きい。

エ 研究課題が抽象的な問題や現状で大きな問題(例えば「妖怪から学ぶ」)は、具体的な提案に至らない(日本の妖怪文化はすばらしい)で終わってしまっている。こうしたグループの場合、課題研究の途中でどのような指導、評価をすればよいか高校の教員だけでは指導、評価は難しい。

## (13) 今後の予定

今後は、(12)ア～エの課題を大学の先生や高校教員、企業などから指導助言をいただきながら解決していきたい。また、ルーブリック評価と生徒の自己評価を定期的に複数の教員で点検しながら、平成29年度生よりルーブリック評価を実施していく予定である。